

アイヌ語のおもしろさ

知里 真志保

アイヌ語やアイヌ文学を扱っていると、我々の予想もしなかったような考え方にぶつかってとまどいするのは毎度のことである。

例えば氷をアイヌ語では「ルプ」(lu'p)という。「とける・もの」ということである。日本語の「コオリ」という語は「凍るもの」という意味であったと思われるから、指し示す対象は同じでも、言葉の裏の考え方には根本的なくちがいがある。

アイヌ語に、「エネア・レカ・イカ イサム」(ene a-reka-ika isam)という表現がある。直訳すれば、「どづ われら・褒め・よう も ない」ということで、「褒めようもない」から「くさす」という意味にもなりかねない。しかしこのアイヌ語の真意は、「それ以上褒めようとしても、褒めるキツカケがない」ということで、完全無欠を意味する慣用句なのである。

また「ミナ・コヤイクス」(mina-koyakus)という表現がある。直訳すれば「笑うことが・できない」ということである。「笑うことができない」ならば、「笑わないでムツリとしている」のかと思えば、実際は「腹を抱えて笑う」ことである。「これ以上笑いたくても笑えない」というのが、このアイヌ語の真意である。

古くアイヌは、自分たちを取り巻く森羅万象を、自分たちと同様の生き物と考えていた。例

えば風であるが、それは我々にとってこそ単なる空気の動きにすぎないのであるが、彼らにとってはそれは一個のれっきとした生き物であった。またある地方では、風が吹き荒れると、戸外に草刈り鎌を立てて、「風の神よ、あんまり暴れると、あんたの奥さんのズロースが切れますぜ。」などと唱えた。風が女房を連れて暴れまわっているという考え方なのである。風が終日吹き荒れていたのが、夕方になってハタと吹きとだえることがある。そういう夕なぎのことを、「レラ オヌマン イペ」(風が夕方に食事する)という。風も人間同様に夕食をとり帰宅するという考え方である。

アイヌに古くから伝承されているユーカラ(詞曲)の中に大風が吹きさぶ場面がよく出てくる。例えば、激しい風が森を襲うと、大地はごうごうと鳴りわたり、森の木々はヒュウヒュウと鳴り続ける、そして折れやすい木は幹のまん中からポッキポッキと折れくだけ、折れにくい木はしなやかな小枝のようにたわみ伏し、またはじり返す、風が野原に吹いてくると、たちまちそこに生えている青草を根こそぎ吹き上げて、宙にまき散らしてしまう。——というような場面であるが、それを原語の気持ちを生かして訳出してみると、怒れる風が森を襲って木々を投てきするすると、木々が悲鳴をあげて泣き叫ぶ、そして木々のうち、激しい責め折檻に耐えかねて折れたくなったものは自分の意志で幹の半ばから折れていき、あくまでも折れるものかと思うものは、風が襲いかかるとみれば大地に身を伏せてそれをやりすごし、風が行きすぎるとまた立ち上がる、というのである。それに続く文章も従来は風が野原へ吹いてくると、「たちまち生えたる青草を根こそぎに大風が吹き上げて、真っ黒な雲となりて大空へ吹き上りたり」などと訳されたのであるが、「生えたる青草」とあるのは「座っている草」とするのが正しく、木々は立っているから立木なのだが、草は野原一面にあぐらをかいて座っている、そこへ怒れる風が襲いかかり、「あ

7 【くさす】悪く言うこと。
14 【森羅万象】宇宙に存在する全てのもの。

3 【ズロース】女性用の下着の一種。ズボン状で腰回りがゆったりとしている。
14 【責め折檻】厳しく責めること。

ぐらをかいて座すわっている草たちの股またぐらに手をかけて持ち上げ、真っ黒な雲となって大空へ上っていった。」というのであって、そこでは風も、木も、草ももはや単なる非情ではなく、人間と同様の感情をもち人間と同様に行動する動物である。嵐あらしの場面はそれらの動物の間に繰くり返される死闘しとうとして描えがかれているのである。

川などもやはり動物である。動物であるから、それは肉体をもち、例えば上流を「川の頭」、中流を「川の胸」、曲がり角を「川の肘ひじ」、川の流れが幾重いくえにも屈曲くつぎよくして流れている部分を「川の小腸」などと呼ぶのである。また、我々の考え方からすれば、川は山から発して海に入るものであるが、アイヌの古い考え方に従えば、それは海から上陸して山へ登っていく動物である。我々が川の出発点と考えて「みなもと」（水源）と呼んでいるものを、アイヌは川の帰着点と考えて「ペテトコ」（川の行き先）と名づけ、また我々が川の合流点と考えて「落合おちあひ」と呼んでいるものを、アイヌは「ペテウコピ」（川の別れ合う所）などと名づけているのは、そういう考え方の表れである。

このように、ものの考え方に大きなくちがいがあって、それがアイヌ語やアイヌ文学の理解をよほど困難にしているのであるが、皮肉なことには、我々がこの言語を学ぶ意義と興味の一つは、また実にそこにあるのである。

〈出典 『和人は舟ふねを食う』（北海道出版企画センター、二〇〇〇年）〉

【著者】知里 真志保（ちり ましほ）

一九〇九（明治四二）年—一九六一（昭和三六）年

言語学者。北海道の生まれ。

【著書】『地名アイヌ語小辞典』『アイヌ語入門—とくに地名研究者のために』など